

## 【優秀賞】

タイトル：受け継がれる笑顔

生徒氏名：坪田萌依

「近よるな！ロスケ！お前らみんな北海道から出ていけ！」ロスケとは日本語でロシア人を示す差別用語です。

なんて冷たい言葉でしょう。でもこの言葉はロシア人と結婚した日本人一家に毎日の様にあびせられた言葉だといいます。

漁師をしていたロシア人の男性が北海道に仕事に来て日本人の女性と恋に落ち二人は家族や親類の反対を押し切って結婚して北海道に住居をかまえました。二人の間には二人の子供が生まれました。二人の子供はロシア人の瞳をした女の子でした。ほとんど自給自足の生活でしたが、それなりに幸せだったといいます。しかし、家を一步出ると、差別というつらい現実がありました。「ロスケに売るものなんてない！」と店では必要な物も売ってもらえず、娘を学校に通わせたくても「ロスケの子は学校に来るな！」と、同じ世代の子供達からも差別を受け、娘達は学校にも行けず、自宅で母親に勉強を教えてもらう毎日でした。両親が汗水流して耕した畑に火をつけられたこともあったそうです。

ギリギリの生活の中で家族は頑張りました。でも、娘が十歳になる頃父は病気で亡くなってしまいました。母は女手一つで二人の娘を育てました。そんな母も父が亡くなってから二年後には病気で亡くなりました。残された娘達は父と母の遺骨を持って母の実家を頼りに家を出る決意をしました。母の実家では想像に反して快く迎え入れてくれたそうです。

娘達は初めて学校に通うことが出来るようになったそうです。日本人離れしたその容姿のためか学校でも時折差別を受けることもありましたが、時代も変わってゆき、娘達が十六歳になる頃には「ロスケ」や「ロスケの子」などというヒドイ言葉を言う人はいなくなったそうです。娘達はお互い助け合い差別にも負けることなく成人となり、日本人の男性と結婚し、その後は幸せに暮らしました。その娘というのが私の曾祖母です。

曾祖母は、二人の子供に恵まれました。その一人が私の祖母になります。曾祖母から祖母へ、祖母から母へ、母から私へ伝わっているアドバイスがあります。それは「どんなつらいことがあっても、いつも笑顔でいなさい。笑顔は生きるパワーを呼んでくれるよ。」という言葉です。私はそのアドバイスを守れているだろうか。今一度考えてみました。

「人権」という言葉を辞書で調べてみました。そこには、「差別されない権利、自由に生きる権利、人間らしい最低限の生活を国に保障してもらう権利、きちんと基本的人権が守られるように国にお願いする権利」と書かれていました。私はそれを見て福沢諭吉の「学問のすゝめ」に書かれている「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉を思い出しました。現実的な問題として、例えば「差別」や「イジメ」について考えるのだとしたら、私は差別やイジメがこの世からなくなるためには何をしたいのか、何をすべきなのか、これからも真剣に考えなくてはならないと本気で思っています。

私の母は、ボランティア活動を通じて世界中に友達があります。言葉や人種もそれぞれ違った国の友人ですが、そこに差別や偏見はない、言葉が通じなくても笑顔は世界共通だといつも言っています。私は母のその言葉が大好きです。

私はみんなが笑顔でいられるような社会になるように努力したいです。まずはみんなに笑顔で元気にあいさつしてみようと思います。